

解 説



教育・研究機関における品質工学の展開 2016

—品質工学は就活の売りになるか?—

Development of Quality Engineering at Academic Research Institutions 2016 — Does Quality Engineering Secure Employment? —

水谷 淳之介*

Junnosuke Mizutani

山本 桂一郎*

Keiichiro Yamamoto

早川 幸弘*

Yukibiro Hayakawa

第16回品質工学会学校関係者懇談会

開催日 平成28年6月22日(水)

場 所 品質工学会事務局会議室

主 催 品質工学会学校委員会

出席者(五十音順)

小池 昌義 産業技術総合研究所
 五味 伸之 福井工業高等専門学校
 齋藤 之男 芝浦工業大学
 高田 圭 信州大学(セイコーエプソン)
 榎原 弘之 九州工業大学
 早川 幸弘 富山高等専門学校
 矢野 耕也 日本大学
 矢野 宏 応用計測研究所
 山本桂一郎 富山高等専門学校
 (司会) 水谷淳之介 富山高等専門学校

1. 見えない規制と戦う品質工学

水谷 第16回の学校関係者懇談会をはじめ。今回は最初に矢野宏氏から「品質工学の教育・研究を取り巻く規制」について、齋藤之男氏からは「品質工学会に学校関係者が増えないこと」について話題提供をいただき、これらに関連する学校の諸問題について討論したい。

矢野(宏) 鴨下隆志氏から、「もし田口玄一に会えなかったらどうなっていたらだろうか」という重要な質問が出ている。それを討論するということはとても重要であるが、そこで私は品質工学というのは田

口氏の思想だということを言いたい。田口氏の思想を形にするということはイデオロギーであり、イデオロギーというのは必ず劣化する。今の品質工学はものすごく劣化していることが目立つ。だからそれをなんとかしなければならぬと思ひ発言している。

水谷 本誌に連載中の「何にでも役立つ品質工学」の論説や「地震の予測の研究」は、その思いを具体化している。

矢野(宏) 早川幸弘氏と地震の研究を続けていて気になるのは、地震の予測は既得権益になっているということだ。年間に数百億円かけてやっていたことを、汗水たらしてパソコン一つであつという間に予測されてしまうと反発がある。どこの企業も逆に楽になるはずだが実際の反応はその逆である。このようなことを形にするのは研究論文である。だから私は、研究論文を書かない人は信用できない。しかし、学校の先生は意外と書いていない。精密工学会では発表件数が1000件以上あるけれど、論文は年間200件くらいだから、論文を書く人は大体20%くらいである。だから研究論文を書かない人は駄目だ、と私ははっきりそう言った方がいいと思う。研究論文を書くということは、具体例をやるということだ。田口氏は常に具体例を考えながら発表していたと言っていた。だから具体例をやらなければならない。そして私は「能書きは言わない」と心掛けてきたつもりだ。能書きを言う人は多いが、品質工学を学べば誰だって能書きくらいは言えるようになる。しかし、実際に事例をやってみると能書き通りにはいかない。

* 富山高等専門学校